

## 1月24日 給食集会でのお話

皆さんおはようございます。校長先生からは、「命をつなぐ」「食べることは生きること」というお話をします。

校長先生は、幼い頃、好き嫌いがあり、魚はほとんど口にできませんでした。今は何でも美味しくいただきますが、実は今でも、美味しいと思う気持ちの片隅に「えい」とかけ声をかけないとならない気持ちが少しですが、なぜか確かに あったりします。ある本と出会ったとき、そのことに合点がいました。

お祝いの席などに利用する近所の料理店に、大きな生け簀がありました。お店の人がそこから魚を網で掬うとすぐに捌いて、活き造りのお刺身として運んでくる一部始終を見たのは、恐らく小学校に上がる前だったと思います。とにかく衝撃でした。先ほどまで楽しげに気持ちよさそうに泳いでいた魚がこんな姿になってしまふとは……

その日を境に、魚を口にすることができなくなりました。ある日、それを見かねた父が「美味しいんだから食べなさい」と秋刀魚を一欠片、私の口に運びました。「な、おいしいだろ」と言う父。「うん、お魚の味がする」「面白いことを言うね。魚を食べているんだから魚の味がするに決まっているじゃないか」と父は笑います。

……違う。「あのお魚」の味がするの。生け簀で泳いでいて捌かれた。なんだかあのお魚の命が一瞬で奪われたことの遣る瀬なさが口の中に広がってしまうようで、でも、幼い私はそれを伝えることができず、もどかしく思ったことを覚えています。

ある本とは、「いのちをいただく」(坂本義喜:原案、内田美智子:作、魚戸おさむとゆかいななかまたち:絵)という本です。

食べ物は全て、生き物の命でできています。この本は、「食べ物の向こう側」を想像することが大切なこと、だからこそ大事に感謝しながら食べるのだということを教えてくれます。

「人が生きるということは、命を頂くこと。殺すこと。私たちの命は、多くの命に支えられている。」これはその本の一節です。

どうぞ、一つ一つの命に想いを馳せて大事にいただくことで、その命を皆さんの命につないでください。